

成安造形大学開学10周年記念関連事業

天地の分かれし時ゆー大地の鼓動ー 「仰木太鼓」演奏会

日時:2002年4月27日(土)

会場:成安造形大学

企画:デザイン科住環境デザインクラス

デザイン科住環境デザインクラス教授 磯野英生

開学10周年を迎えるにあたり、住環境デザイン群では、過去10年の教育の検証をおこなうとともに、未来へ飛翔するための根拠を模索していた。そのなかで今一度、教育および表現の「原点」に立ち戻ることに思い至った。足下を見直し、堅め、そこから思い切り跳ぶ必要を感じたと言ってもよいだろう。そうしたなかで、「仰木太鼓保存会」の方々に来ていただき演奏会を開催することになったのは、感慨深い。10年前、大学が開学した時に催された祝賀行事で、「仰木太鼓」が演奏されたことを想い起こしたからである。こうしたことを通して、われわれの足元である「地元」との絆を確かめることができたのは、貴重な体験であった。「地元」とはまさしく足元であり、「原点」に立ち返るという思いと重なり合っていると思われたからである。「原点」ということで言えば、打楽器である太鼓も、音楽の発生に立ち会った「原」楽器であるはずだ。あるいはまた、われわれ住環境デザイン群では、ここ7、8年、琵琶湖に生えるヨシを素材とした造形に取り組んできた。4m余りにも育つヨシという素材の特性を発見し生かしてゆく制作の姿勢は、まさしく原=元=素から始めるという意味で、打つという原初的行為で音を創り音楽を産み出すという太鼓の演奏と相通じると思われた。

演奏会場となった本学の野外劇場には、二年生になったばかりの住環境デザイン群の学生のほぼクラス全員が参加して、舞台装置が造られた。一人100時間以上、3週間みっちり制作に当たった甲斐あって、素晴らしい作品に仕上がった。(篝火を燃やす鉄製の灯台火も併せて造られた。)

学生諸君が意識して造っていたわけではないと思うが、この舞台装置の造形を観てふと想ったことがあった。

本学のある滋賀=近江の地には、龍神と大百足にまつわる伝説がある。大百足に困らせられていた龍神が、勢多の唐橋を通りかかった俵藤太秀郷にその退治を依頼し、成就するという話である。広場とグラウンドに設置された舞台装置を観ると、手前にある野外劇場の芝生の上には、渦巻くマッシブな形のヨシが舞台を取り巻いていることがわかるが、それはあたかも口を開けた龍のように見え、またグラウンドに長々と伸びた尖頭アーチのトンネルは、大百足のように見える。大地=山の精である大百足と、天と水の精である龍がぶつかり咬み合う姿が、イメージとして浮かんできたのである。天と地、水=湖・川と山という、相反する原理がぶつかり合うという姿は、言い換えれば、天地が分かれ、水と山が分かれる天地開闢の時に立ち会っているかのようにも思える。学生たちが夢中で制作するなかで、その集合的無意識が立ち現れ、そうした形に昇華したと言っても過言ではないと思われた。音と形と空間が「今・ここで」初めて立ち現れる、それは世界の始まりであり、その現場にわれわれは幸福にも立ち会ったのではなかったか。

演奏会当日の4月27日(土)は天候に恵まれ、仰木太鼓を数十年間指導してこられた浅野先生のもと、仰木小学校の生徒による元気な太鼓の演奏を聴くことができた。



■会場風景



■会場風景:住環境デザイン群の学生が制作したヨシの作品



■仰木太鼓を奏でる子どもたち



■演奏に聴き入る観衆

成安造形大学開学10周年記念事業・関連行事
アート・ワークショップ 里山 小宇宙を旅しよう

「今森光彦氏と撮る。 井上直久氏と描く。」

日時:2002年4月27日(土)

会場:成安造形大学+大津市仰木地区

芸術文化交流センター所長(平成14年度)
造形美術科ファイバーアートクラス教授
藤本哲夫

今森光彦プロフィール

写真家。1954年生まれ。琵琶湖にのぞむ田園にアトリエを構え、身近な自然を撮り続ける一方、熱帯雨林や砂漠など世界の辺境を踏破するなど、あらゆる自然を取材。1994年、第48回毎日出版文化賞、1995年、第20回木村伊兵衛賞など、受賞も多数。1988年、写真集『今森光彦 昆虫記』(福音館)のほか、1996年エッセイ集『里山の少年』(新潮社)など著書も多い。

井上直久プロフィール

成安造形大学デザイン科イラストレーションクラス教授。画家。1948年生まれ。広告代理店勤務、大阪府立高校教員を経て、1992年よりフリー。1995年、映画「耳をすませば」(スタジオジブリ作品)で幻想シーンの美術を担当。画集『虹化石の街へ』(サンリオ)、『世界はあなたのコレクション』(架空社)、CD-ROM 画集『イバラードの旅』『イバラードの世界』ほか、刊行物多数。

新世紀を迎え、われわれを取り巻く環境について関心が深まり、特に人と自然との共生が大きく取り上げられている。

成安造形大学では人と自然との共生のモデルとも言える「里山」をテーマとし、その仕組みを知るため2000年には3回連続セミナー「里山 人と自然の美」を、そして2001年12月には公開シンポジウム「里山 新しい物語の創造」を開催した。また、2001年からは「仰木・里山 地蔵プロジェクト」を立ち上げ、2002年には地蔵マップを完成させるまで展開してきた。

芸術を愛し、芸術を生み出そうとする本学が、「里山」とどう関わるのか、その答えの一つが2002年4月27日(土)に開催したアート・プロジェクト《里山 小宇宙を旅しよう「今森光彦氏と撮る。井上直久氏と描く。」》である。これは社会人一般の人たちが中心となり、一部本学在学学生も加わった公開アート・プロジェクトである。

当日、本学生涯学習センターにて96名の参加者が集まり、写真家・今森光彦氏と画家・井上直久氏からそれぞれ自身の作品紹介や棚田を中心とした里山の撮り方、描くポイントが解説された。両氏は里山のどこに魅力を感じ、何を表現しようとしているのかをユーモアを交えながら話された。特に二人掛け合いの対談の面白さにはこのプロジェクトの成功を予感させるものがあり、その聴衆は笑いとともに聞き入っていた。午後には写真と写生それぞれのグループが両氏の指導のもと、仰木、里山の棚田を中心としてゆっくりと時間を掛けて散策した。参加者はゴールデンウィークなどを利用して、指導を受けながら作品制作に励んだ。

参加者による力作は5月18日(土)から6月2日(日)まで、びわ湖大津館の特別展示室で開館最初の合同企画展として展示され、約3700名の見学者があった。表彰式や作品講評会を設けたことも手伝って、最初のアート・プロジェクトは大成功に終わった。



■対談する今森氏(右)と井上氏



■スライドを用いて講演する井上氏



■仰木地区を案内する今森氏



■井上氏とのワークショップ



■今森氏とのワークショップ

成安造形大学開学10周年記念事業
「水の惑星映像祭」関連企画

ビデオ撮影会 「琵琶湖水郷を撮る！」

講師:小林はくどう(デザイン科教授)
日時:2002年11月10日(日)
会場:近江八幡市マルチメディアセンター(講義)
近江八幡市の琵琶湖水郷地区(撮影)
共催:関西ビデオネットワーク
協力:滋賀県ケーブルネットワーク推進協議会

関西ビデオネットワークは、関西に住むビデオ・アマチュア・カメラマンの集まりだ。この組織と共催でビデオ撮影会「琵琶湖水郷を撮る！」を企画した。琵琶湖東岸の町、滋賀県近江八幡市には、日本最大の水郷地帯が今も残っている。その景観の美しさは古くから知られ、「春色・安土八幡の水郷」として、琵琶湖八景のひとつに数えられている。西の湖一帯を観光船で巡る水郷めぐり、のどかな田園とヨシの群生地帯に囲まれ迷路のように続く水路は、四季折々の風情にあふれた自然の宝庫だ。今回は関西ビデオネットワークを通しての呼びかけに35名の参加者があり、遠くは和歌山や三重、愛知から来られた。講師として恥ずかしいが、私はこの地をよく知らない。そこで地元在住の川越さん(読売テレビの契約カメラマンとして滋賀県のニュースを撮影している)、滋賀ケーブルネットの汲田さん、近江八幡ケーブルテレビのスタッフらに登場していただき、映像を交えてレクチャーした。

短時間の撮影なのでテーマを考えること、できれば美しい風景の光だけでなく、問題を含む影を発見するように、また自分のエピソードを大切にしようと話した。この日は晴天で、晩秋を楽しむ人たちが溢れ、のどかな水郷というよりも喧噪の世界だったが、様々な風景を撮影していた。3時頃から撮影をしたテープを見ながら作品としてのまとめ方の指導を試みたが、白熱した議論となり、終えた時には暗闇となった。ボランティアの学生たち、早朝から遅くまでご苦労様でした。

(小林はくどう)



■参加者に指導する筆者(小林)

仰木・里山 地蔵プロジェクト

2002年度活動報告

企画：仰木・里山 地蔵プロジェクト

仰木・里山 地蔵プロジェクト

里山環境の残る仰木地域のフィールドワークを通じ、この地に多く点在するお地蔵さまの記録地図を作ろうと2年ほど前から始まった「地蔵プロジェクト」は、2002年度、地域の伝統行事である地蔵盆や夏まつりに参加したり、地元小学校との合同フィールドワークを行うなど、仰木との関係を深めるための活動に力を入れました。

今年度の初め頃から、ご縁のあった地元の方や自治会を通じて、こちらの企画や希望を打診。初めての試みであることから、当初様々なお意見もありましたが、数度にわたる話し合いから我々の思いが通じ、夏まつりや地蔵盆への参加が具体化しました。

本格的な準備のため、8月初旬、ご厚意でお借りすることのできた地元の一軒家にてメンバーの合宿を開始。合宿初日の9日には、本プロジェクトの発起人のひとりでもある写真家の今森光彦氏にも来ていただき、地元の方も招いて、プロジェクトの説明会も兼ねてレクチャーをしていただきました。

この家は仰木で最も大きい小椋神社の参道に面していることもあり、我々の滞在中、毎日のように近所の方が野菜や西瓜の差し入れを持って来て下さったり、子供たちが遊びに来て準備を手伝ってくれたりしました。

8月18日、地域のシンボリックな施設である太鼓会館周辺にておこなわれる連合自治会主催の夏まつりに参加。会館隣の仰木幼稚園をお借りして開催した「手作りランタン・ワークショップ」には、予想をはるかに上まわり、子供・父兄をあわせ、約100人の方が参加して下さいました。また、会館内では、プロジェクトの研究成果を展示発表したり、地元の各団体による模擬店とともに、桃ゼリーのお店も出店。この日の模様はケーブルテレビにも取材され、地蔵盆を前に、仰木の皆さんにプロジェクトの存在をアピールすることができました。

その約1週間後に、いよいよ地蔵盆当日を迎えます。23日には、辻ヶ下という字(あざ)の仰木で最も大きい延命地蔵堂を中心にした盛大な地蔵盆がおこなわれました。我々は、この地蔵盆のプロローグともなるように、会場内にスクリーンを設置し、お地蔵さまにまつ

わるお話を紙芝居化したスライド・ショーを披露。また、子どもたちに配るお菓子といっしょに、仰木中のお地蔵さまを撮影して作ったオリジナルの「地蔵カード」をプレゼントしました。

そして、日が落ちて薄暗くなってきた頃、いよいよ手作りランタンの点灯です。地蔵盆がおこなわれている辻ヶ下のあたりから小椋神社、そして野仏さまがたくさんおられる柱(はしや)の集落までの600メートルほどの道を、約300個のランタンで灯しました。地蔵盆の終わる夜9時頃には、辻ヶ下に集まっていた人たちも帰りがてらにランタンの道に繰り出し、幻想的な風景を楽しんで下さいました。

24日には、上仰木の天社門(てんじゃかど)の六体地蔵尊をメイン会場とし、同じくスライド・ショーや地蔵カードの配付をおこないました。また、この日のランタンのルートは、天社門から広がる田んぼの農道約500メートルに設定。ろうそくを灯すランタンだけでなく、会場前の空き地一面には、豆電球を仕込んだたくさんの風船ランプを浮かべ、不思議な空間を作り上げました。

谷下にあたる天社門のランタンの道は、遠く尾根づたいに広がる上仰木や辻ヶ下の集落からも見わたすことができ、家の窓から偶然に見えた不思議な風景に誘われ、足を運んで下さる方もたくさんおられました。いつも以上に賑やかな地蔵盆に、地元の方の口々から喜びの声を聞くことができ、メンバーも勇気づけられました。

地蔵盆の参加がきっかけで、その後11月12日と13日に、地元の仰木小学校3年生との合同フィールドワークも実現。これまでこちらからの一方的な働きかけであった活動が、反対に地元からの要請を得るまでになりました。

2002年度の活動を通じて築いた地域との確かな信頼関係や、新しく得ることのできたたくさんの情報を生かし、今後、さらに地域と大学との深い関わりから成り立つ意義深い活動を続けていきたいと考えています。



地元の子どもたちとランタンづくりにげむ

浄土絵画の系譜

おもに比叡山麓の事例を中心に

人間学講座教授（日本文化史）

木村至宏 KIMURA Yoshihiro

はじめに

近江の豊かな歴史と文化は、日本最大の湖の琵琶湖・東日本と西日本を結ぶ交通路・周囲を取り囲む美しい山なみといった三つの要因によって構築されたといえる。

なかでも比叡山系をはじめとする近江の山々は、奈良時代以降日本歴史のうえに大きな足跡を残し、仏教文化を構成する母胎となった。とくに比叡山は、平安時代に最澄（767～822）によって延暦寺が創建され、天台仏教の拠点として、日本の文化史上において主要な位置を占めるに至ったことは論をまたない。そのなかで今回取りあげたのは、文化史の一翼をなう仏教絵画の一分野の浄土教絵画（浄土絵画）の系譜である。

日本浄土教の萌芽は、最澄の高弟円仁（794～864）が承和14年（847）に入唐求法を終え日本に教義を将来したことによる。天台浄土教の思想は、そののち比叡山の良源（912～985）、さらに源信（942～1017）によって発展した。そのなかで後世の日本の思想に大きな影響を与えたのは、比叡山横川の源信（恵心僧都）であった。源信が著わした『往生要集』は、地獄の迷いの世界と極楽浄土の有様を対照的に記述し、日本浄土教の理論的基礎を築いたものである。平安時代に源信の主唱する浄土思想の視覚化（絵画化）が進み、浄土教絵画として誕生した。平安時代後期から鎌倉時代にかけて、相次ぐ戦乱や天変などによる人心の不安といった社会世相を反映して、多くの浄土教絵画が製作されたのであった。

日本浄土教の先駆をなした比叡山およびその山麓には、現在でも浄土教絵画の遺品を数多くみることができる。しかもその描かれた絵画の内容は多岐にわたっている。ここで比叡山麓（滋賀県大津市坂本を中心に同市伊香立まで）にどのような浄土教絵画が伝存しているのか、それらの種類およびその諸相についてみることにした。

来迎図の諸相

日本における浄土教絵画の発生は、すでに奈良時代の寺院にみることができる。たとえば中国に始源をもつ極楽浄土の世界を描いた浄土変相図^{〔註1〕}は、法隆寺金堂壁画・奈良元興寺極楽坊板絵や奈良当麻寺の当麻曼荼羅図などがあげられる。なかでも八世紀に製作された当麻寺の綴織の当麻曼荼羅（国宝）は、

阿弥陀如来の住む極楽浄土の世界が詳細に描かれ、その後の浄土教絵画に大きな影響を与えたことはよく知られている。

平安時代に入つてすでに述べたように最澄の高弟円仁が入唐求法の旅を終えたあと、比叡山に常行三昧堂を建立し、堂内に阿弥陀如来を安置して四方の壁に九品浄土図（生前の行ないによって九通りの往生の場面を描いた世界）が描かれていたという。^{〔註2〕}そのあと前述したように比叡山延暦寺の中興の祖とよばれた良源が、浄土教思想を促進した。そしてその系譜をもつ源信（恵心僧都）が、日本浄土教の基礎を確立したのである。

源信は、寛和元年（985）に『往生要集』を著わした。そのなかでとくに「厭離穢土 欣求浄土」（現世を厭い離れ仏の住む清浄な浄土を願望）を強調している。これによって浄土思想（信仰）が急速に発達したのである。

その背景には、当時の社会不安の世相と末法思想とが重なり人々が浄土往生を願う信仰の投影があった。そして現世を穢土とし、ひたすら浄土を希求する浄土信仰の具体化が平安時代中期ごろからはじまった。たとえば建造物でいえば、宇治平等院鳳凰堂をはじめ阿弥陀如来像を本尊とする阿弥陀堂の造立、その一方絵画として来迎図が生まれたのである。

来迎図は一般に聖衆来迎図・阿弥陀三尊来迎図・聖衆あるいは阿弥陀二十五菩薩来迎図・山越来迎図などが含まれる。いずれもそれは基本的描法として、浄土の世界からの使者いわゆる阿弥陀如来が、多くの菩薩群を従えて往生者を迎える有様を構図化したものである。端的に言えば、見る者としてはるか遠い浄土と現世を直接結ぶ直線的な構図といえるだろう。

この種の来迎図で最も著名なものは、かつて比叡山横川安楽谷に伝存したという平安時代後期の国宝の絹本着色阿弥陀聖衆来迎図（高野山有志八幡講十八箇院蔵）である。^{〔註3〕}本図は三幅対の大画面に前方の菩薩を大きく、後方の諸尊を小さく描き、阿弥陀如来が眼前に現出したような大胆な構図で描かれている。

その後浄土思想の浸透によって、鎌倉時代に入つて来迎図は多く製作されるようになった。なかでも日本浄土教の発祥ともいえる比叡山延暦寺の山麓にすぐれた遺品をみることができる。ここで順次おもな来迎図をみることにする。

まず比叡山麓の北部にあたる大津市伊香立下在地町の新知恩院（寺院名はかつて浄土宗知恩院が応仁の乱を避けてこの地に避難したことによる）には、絹本着色阿弥陀二十五菩薩来迎図（重要文化財）^{〔図1〕}がある。写真でもわかるように阿弥陀如来立像を中心に二十五菩薩が、往生者を極楽浄土に迎える姿を描く。菩薩が思い思いに手をあげ、身体をくねらせ、楽器をもち歓喜に満ちながら舞踊をし、右下の建物の縁先に坐す往生者を迎えに来る状景を画面いっぱいに描かれた躍動的な来迎図である。これだけダイナミックな来迎図は、ほかに例が少ない。

比叡山麓の湖畔に近い大津市比叡辻二丁目の聖衆来迎寺には、絹本着色阿弥陀二十五菩薩来迎図（重要文化財）が所蔵されている。本図は先頭を行く観音菩薩と勢至菩薩らの五菩薩が、すでに下方にくんだり、右下の往生者の屋敷の前近くに達し、阿弥陀如来をはじめとする二十五菩薩の一団がそのあとに続くといった構図である。

また、山麓にあたる大津市坂本本町の安楽律院蔵の絹本着色阿弥陀三尊二十五菩薩来迎図（重要文化財）^{〔図2〕}は、菩薩群であるがいまままでの来迎図とは描き方が異なる。すなわち写真のように大きな飛雲の上に